

いまいちど鈴鹿もうでに

辻 正

村田邦夫先生からの便りが絶えて久しい。昭和六十一年五月、生家の隣りに佐佐木信綱資料館ができて以来、先生のいわゆる「鈴鹿もうで」は始まった。

遠く湘南の地から、バス・電車・新幹線と乗り継ぎ、七時間ほどかけて石葉師へ。資料館に着くや、先ず展示室正面に飾られた信綱先生の遺影にぬかずかれ、用意の花など供えてご挨拶される。こうして先生の短い鈴鹿ぐらしが始まるのであった。

あれから十余年、鎌倉佐々木家をはじめ一族・一門の方々を中心に数多くの貴重な資料類が集められた。まさに先生の執念ともいえるべきもので、その熱意は比をみないものがあり、また価値も類をみないといえよう。かくして蒐集された資料の整理・解説・展示・出版物など、ひとつとして先生のお力によらないものはない。

本号への執筆を快諾くださった石川不二子氏は、『短歌研究』（平成八年四月号）「転蓬——さまざまに出遇い」の中で先のことにも触れながら、凌寒荘時代の若き村田邦夫氏の素顔を親しみを込め次のように描いている。「村田邦夫氏は、（中略）つねに信綱の身近にあった。国学院出身の国語教師で、湘南中学（のち高校）勤務のかたわら、日曜日はかならず、凌寒荘にあって信綱の秘書としてつとめ

られた。いがぐり頭に真白い運動靴というスタイルは当時でも異色、ハンサムでダンディであった。」後段では、昭和四十五年、鈴鹿市が生誕地に生家を再建し佐佐木信綱記念館に、六十一年には資料館を建設、その実質的な運営にも文字通り献身された先生のことを「八十歳を越えた今も、氏の『鈴鹿もうで』は絶えることがないらしい。凄い人である。」と、結んでいる。

今、私の手元に一通の手紙がある。日付は、平成十三年六月 月 日とある。野もない紙に太い文字で次の一首が――

雪雲の夕映えぬまま垂るる野に立ちてか細き虹薄れゆく
けふの一日はともかく果てて資料館を出でし夕景の実景
―かかる日の翌日は鈴鹿連山すべて新雪をかぶり、「えやは伊吹」の独峰一七三メートルを仰がん。そのこともはや全くあらざるべし―全く、すべて。（原文のまま）右肩には、「鈴鹿川旅情のうた」と詞書。私がいつか先生の歌の中でいちばん好きだといったくにを一首だった。

文字が乱れていてやつと判読はできたが、ご不自由な身体でペンを握られた姿を想うと胸が痛む。もう一度元気な先生を鈴鹿にお迎えしたい。

* * * * *

平成十三年十二月、故植村文夫先生（三重大学名誉教授、元佐佐木信綱記念館保存会会長）の御蔵書四四〇余冊の御寄贈を御遺族からお受けしました。現在展示室の本棚に、その一部を御披露させていただきます。

佐佐木信綱資料館だより

第16号

目次

凌寒荘の客	石川不二子
展示室だより	磯上 知里
信綱一首	村田 邦夫
いまいちど鈴鹿もうでに	辻 正

発行 鈴鹿市教育委員会
連絡先
・社会教育課 鈴鹿市神戸九一―一―一五
（☎〇五九三―八二―九〇三）
・佐佐木信綱資料館
鈴鹿市石葉師町一七〇七―三
（☎〇五九三―七四―一三二四〇）

凌寒荘の客

石川 不二子

「奈良の橋本です。」

凌寒荘のお玄関、黒衣の大入道が言う。あ、薬師寺管主橋本癡胤老師、ととっさに解ったのは、信綱先生の歌碑のゆかりでお名前を承知していたからでもあり、見るからにただならぬ人物だった故でもある。のちに、「週刊朝日」誌上、徳川夢声の連載対談「問答有用」に登場して天動説を譲らず（仏教原理主義？）世を湧かせた人物である。

玄関番というのではないが、時々写し物などのお手伝いを仰せつかり、お玄関の間のじゅうたんの上に、お座布団と文机を頂戴して坐っていたので、お客があれば取次ぐこととなる。昭和二十年代半ばから三十年代半ばごろまで、高校生・大学生・高校教師の時分のことだ。先生はいちいちアルバイト代を下さった。

谷崎松子夫人は玄関でもお取次をしたが、熱海市観光会館で信綱先生米寿のお祝いの会があったときも会場で御案内役をした。いかにもつつましくして居られるのに、あた



凌寒荘での信綱先生

りを払う感じがあるのはさすが、と思った。

文士の夫人といえ、凌寒荘に来られたのではないが、吉川英治夫人文子さん。信綱先生が散歩の道すがら、新築の吉川氏の別邸に、ご近所のおよしみで気軽に声をかけられたのだった。あいにく留守でございまして、と夫人が応待された。先生の散歩のお供をしたのはこの時一回きりだった。足を疾まれる前だから、かなり早い頃だったに違いない。

五島美代子女史は、私が参上したときにお玄関で色紙かなにか書いておられた。細かいきれいな字。にこやかで暖かい方だと思った。

お取次をした覚えはないのに、凌寒荘で何回かおめにかかったように思うのは金田一京助博士。色白の手足の長い、この方もいつもにこにこして居られたが、当時の「心の花」にはお嬢さんを亡くされたい

たましい歌が載っていたのだった。
お正月の一日か二日、先生はお居間(兼書齋兼寢室)のお掃除をされる。来合わすのは伊藤嘉夫氏(若く信綱の秘書、西行の研究者)と梅沢千丸氏(もとと経理将校。この人の歌は毎号「金物屋の歌」、椿一郎氏は「農人の歌」、飯田恒治氏は「機関士の歌」とタイトルがついていた)と私が常連であった。

正月には、「心の花」編集委員の方々が揃って御挨拶に来られる。東京で忙しくしておられた時と違い、熱海に来られてからの先生はお客を歓迎されたが、一番嬉しく思われたのはこの日ではなかったか。三十年代になって、私の歌が短歌総合誌に載るようになると、お呼び出しがあった、末席に私の分も、昼食のお膳が並ぶのだった。顔つなぎをしておいてやろうとの、先生の思召しであつたらう。

佐佐木幸綱氏を見掛けた最初がいつかは分らないが、席を同じくしたのはやはり一月だったと思う。凌寒荘と道路を隔てた、こちらは比較にならぬほど大きい別荘を借りて歌会があつた時で、それぞれ高校生と大学生、話はしなかつたと思う。
(歌人)

凌寒荘 昭和十九年十二月、前年に肺炎を病んだ信綱先生は静養のため熱海西山にある凌寒荘に移り住みました。荘名は王荆公の「牆角数枝梅、凌寒独自開」の句にちなみ、徳富蘇峰翁が命名したもので、先生は昭和三十八年、教元年九十二歳で亡くなるまでをここで過ごしました。

展示室だより

信綱は「余技」として「琴唄」「絃琴の唄」「長唄」「戯曲」の作詞を挙げている。「余技」とは「専門以外の技法」という意。信綱は万葉集をはじめとする古典籍の研究、作歌活動一筋に思われがちだが、そうではなく多岐にわたった活動をしてきたことが分かる。今回は、信綱の「余技」の中から「長唄 伊勢参宮」を紹介したい。

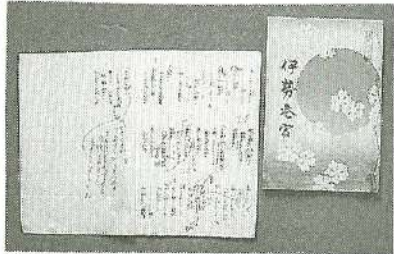
「伊勢参宮」は信綱作詞、杵屋佐吉作曲。昭和五年、信綱五十九歳の時に伊勢山田の公会堂で発表。
信綱は、「昨年の御遷宮奉仕について長唄を唄された」のがきっかけで、神宮の式年祭のために作った。作曲者の杵屋佐吉とは、「長唄 秩父の長」を作ったことが縁で一緒に手掛けた。

「伊勢参宮」は、序前唄、本唄一、五、結びで構成されている。大まかな流れとしては、大阪出発↓白子の不断桜など道中見物↓お祓い町↓伊勢神宮参拝↓二見の浦など伊勢の名所めぐりとなっており、お伊勢参りの様子が生き生きと描かれている。「伊勢参宮」には昭和三十七年、信綱九十一歳の時に新年の放送用にと再閲・加筆した新作がある。新作では参拝↓お祓い町になっていて、順序が入り代わっている。また、参拝の様子が丁寧な描かれている。

全文紹介は無理なので、信綱が「お杉お玉や、宇治橋のなげ銭の事など、古いものにある句を採り用いたので、終りの方の二見の浦のところに『今は昔の筆草を、かきあつ

めたる藻汐草』と唄の中にいひわけをしておいた」と述べている箇所を挙げることにしたい。

本唄二
歩みも軽し足引の
山田と宇治の間の山
お杉お玉が三味の音は
ペンペラペンペラ チャンチャラチャン
無性矢鱈に弾きたつる



展示中の「伊勢参宮」

二文三文 五六文
投うればちやつと顔ふり向け
縞さん紺さん中乗さん
遣て行んせ投うらんせ
頬冠さん梶櫛さん
お江戸さん上方さん
【注1】江戸歌舞伎の舞踊曲として発達した三味線音楽。
【注2】明治十七、昭和二十年(一八八四〜一九四五)。長唄三味線方。他作品に、「隅

田の四季」「夢殿(信綱作詞)」など。
【注3】昭和四年十月、庭燎(神楽の最初の曲を指す。信綱の場合、神楽の中の歌方として庭燎の歌を歌った)に奉仕したことを指す。

【注4】江戸時代、伊勢神宮の外宮と内宮のあいだの間の山に小屋掛けして、三味線、胡弓に合わせ、俗謡を歌い踊った女芸人。
【注5】「お江戸上りのナア 三度笠ナアエ 縞さん紺さん 中乗さん、遣てかんせ 投うらんせ」―清元『道行試案除』(二世椀田治助著、文政二年初演)より引用。「縞さん紺さん」伊勢参りの参拝者を、着物の柄によって呼びかける言葉。「中乗さん」三人乗りの馬の上で、真中に乗っている人。

【参考文献】『ある老歌人の思ひ出』昭和二十八年朝日新聞社 『作歌八十二年』昭和三十四年毎日新聞社 『日本国語辞典』平成十三年小学館 『日本音曲全集第三卷 清元全集』昭和三年日本音曲全集刊行会 ほか。
*「長唄 伊勢参宮」の全文を展示しています。
(学芸員 磯上 知里)

信綱一首・16
わが道とほくはろけし飛躍は
望むべからず一歩一歩をゆく
昭和二十六年(一九五二)刊『山と水』所収

昭和二十年一月、熱海西山に移り住んで間もなく、前途への希望とその心躍りとを敢えてみずから抑えようとして、詠みこころみた多くの正述心緒歌から、そういうある鬱屈した思いが、初句・第三句の字足らずと、結句九音の字余りとして硬質な非律文的效果を出している。(村田邦夫)『新訂 佐佐木信綱先生とふるさと鈴鹿』より